様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２６１４

研究課題名（和文）ルネサンス期イタリアにおける言語規範と文学理論の深層

研究課題名（英文）Linguistic Norms and the Literary Theory in Renaissance Italy

研究代表者
村瀬　有司（MURASE, YUJI）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：１０３２４８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　研究代表者は、ルネサンス期のイタリアを代表する詩人トルクァート・タッソの英雄詩の傑作『エルサレム解放』の直接話法の8行詩節内でのイレギュラーな配置に注目しながら、台詞を表現する際のタッソの技法とその効果を明らかにし、この研究成果を4本の学術論文として公表した。また研究分担者はベンボの『俗語論』第三巻の和訳を完了し、三種の刊本間の異同を示す資料の整備を進めた。この資料については、国内のみならず広く全世界の研究者に資するべくネット上での公開を目指している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は16世紀を代表するタッソの叙事詩の傑作と、俗語（イタリア語）の使用法について規範となる見解を記したベンボの論考を研究することによって、この時代のイタリア文学の潮流に理論と実践の両面から光を当てた。特にタッソの作品の台詞の配置の検証はイタリアにおいてもこれまで見逃されていたテーマであり、この研究から得られた知見は世界的に見ても大きな意義をもつ。また研究期間中に『俗語論』の文献学研究の第一人者であるカルロ・プルソーニ教授を日本に招聘し、ベンボのテクスト読解・分析に関する重要な助言をえると同時に、国内の複数の大学での講演を通じてイタリア文学研究のレベルアップと専門分野の情報発信を実現した。

研究成果の概要（英文）：The principal investigator of the research, while focusing on the irregular arrangement of direct speech in ottava rima in the heroic poem “Gerusalemme liberata” -a masterpiece by Torquato Tasso- clarified Tasso's technique and its effect on expressing direct narration. The investigator has published the findings in four academic papers. In the meantime, the research collaborator has completed the Japanese translation of the third volume of Pietro Bembo's “Prose della volgar lingua” and is working on the document that highlights the difference between the three editions published in Italy in the 16th century. This material is intended to be made available on the Internet for the benefit of researchers not only in Japan but around the world.

研究分野：イタリア文学（16世紀）

キーワード：ルネサンス期イタリア文学　トルクァート・タッソ　ピエトロ・ベンボ　俗語論　直接話法　叙事詩　『エルサレム解放』　言語規範

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

16 世紀のイタリア文学が近代ヨーロッパの文化形成において重要な役割をはたしたことは広く知られている。しかしながら、そうした影響力の源泉となったイタリアにおける文学言語の規範の成立や、世紀の後半に入って盛んになる文学理論に関する研究は、ヨーロッパ各国において必ずしも活発に行われてきたとは言いがたい。ベンボの『俗語論』やタッソによる創作理論の英訳が現在に至るまでほぼ皆無という状況が象徴的に示すとおり、この種の研究には、容易に乗り越えられない「言語の壁」が厳然として存在している。西洋諸国とは言語も文化もまったく異なる日本においてはなおさらである。

研究開始当初の段階で、研究責任者の村瀬は、16 世紀後半のイタリアを代表する詩人トルクァート・タッソの『エルサレム解放』を対象に、作中で使用されている直接話法の数量データの整理を終えて、先行作品であるボイアルドとアリオストの騎士物語のデータと比較しながら、タッソの英雄詩の直接話法の特徴を検証できる状態にあった。これによって、タッソの作品に見られる台詞の特殊な様態と、詩人が創作理論のなかで論じている修辞技法のそれらの台詞への反映を実証的に分析することが期待された。

一方、研究分担者の天野は、イタリアの文学言語の規範を確立させた、16 世紀前半のピエトロ・ベンボの『俗語論』第三巻の研究に従事し、当時に刊行された三つのエディションを比較検討しながらベンボのテクストの精緻な読解に取り組んでいた。さらに当該分野の第一人者であるペルージャ大学のカルロ・プルソーニ先生とコンタクトをとり、共同研究に取り組む準備を整えていた。

上記の二人の研究者はともに京都大学文学研究科に所属し、双方の研究成果を速やかに共有できる状態にあった。以上が、研究開始当初のバックグラウンドである。

２．研究の目的

本研究は、ルネサンス期イタリア文学の潮流を形成した文学語の規範の成立過程と、これに続いて文人・知識人が強い関心を寄せた文学理論の規範の形成、およびその同時代の代表的作品に見られる反映を、文学史・文化史的視点から捉え直すことを主要な目的としている。

３．研究の方法

研究代表者は、16 世紀後半を代表する詩人トルクァート・タッソの『エルサレム解放』の直接話法に焦点を絞り、8 行詩節におけるその標準的な配置パターンをデータに基づいて明らかにすると同時に、そこから外れるイレギュラーな事例を浮き彫りにし、そのような特殊な台詞の配置の効果と修辞技法の特徴を効率的に分析する方法をとった。一方、研究分担者は、イタリアの文学言語の規範を確定した 16 世紀前半のピエトロ・ベンボの『俗語論』第三巻の分析を進め、16 世紀の 3 種類の刊本巻の異同を正確に整理・検証することによって、ベンボによるテクスト校訂過程とそこに反映する言語規範の意識を浮き彫りにするという方法をとった。さらにこの分野の専門家であるカルロ・プルソーニ教授を招聘することによって、当該研究に質的な飛躍をもたらすことを図った。これらの方法によって研究目的の実現を目指した。

４．研究成果

研究責任者は、トルクァート・タッソの『エルサレム解放』の直接話法について、重要な先行作品であるボイアルドとアリオストの騎士物語の直接話法と、データに基づく実証的な比較検証を行った。その結果、タッソの作品には、8 行詩節の奇数行から始まり偶数行で終わる、オーソドックスな直接話法の配置パターンから外れるものが相対的に多いこと、特に連の 7 行目で終わる台詞が多いことを明らかにした（①）。また「彼は言った」に相当する直接話法の導入表現が発話のなかに挿入されるケースを分析しながら、タッソの作品では、この挿入がしばしば台詞の冒頭で行われること（②）、またこの挿入型の直接話法は詩行の頭から始まる配置が大半を占めるが、『エルサレム解放』では行の途中から始まるものが相対的に多いこと（③）を発見した。さらにタッソの作品では、他の二作品に比べて、導入表現を前行末尾までに提示して次行の冒頭から直接話法を始める配置が多いことを明らかにした（④）。加えて、1 行

以内の直接話法が 8 行詩節の形式的拘束から離れて連内に自由に置かれやすいことを確認したうえで、タッソの作品におけるこの短い台詞の配置傾向を確認した(⑤)。これら 5 つの発見に基づいて、連内の直接話法の特殊な配置と、その発話で使われている修辞技法との関連を検証し、その研究成果をまとめて複数の学術雑誌に発表した。①③④については国内の学術雑誌ですでに公開済みである。また⑤の研究成果については、学内刊行の紀要論文に発表した。さらにイタリアの専門誌に投稿した②の学術論文については掲載が内定している。加えて、国内で今まで紹介されたことのないトルクァート・タッソの創作理論書『詩作論』(水声社)を翻訳し、これに詳細な解説をつけて刊行した。この翻訳は、16 世紀のイタリア詩の創作理論の特色を知らしめる貴重な成果として評価されるものである。

研究分担者の天野は、『俗語論』第三巻の翻訳を完成し、さらに Vaticano Latino 3210 手稿、および P (Tacuino, 1525)、M (Marcolini, 1538)、T (Torrentino, 1549) という三種の完本間の異同を表示する資料の整備を進めた。これは、詳細な註を備えた原テキストと和訳を 6 種のフォント・カラーと 3 種のアンダーラインによって示すことにより、著者の嗜好の変遷を辿ることまで可能ならしめる高度な研究用資料である。上記の手稿そのものは既にバチカン図書館が NTT の協力のもとに精細な写真を公開しており、本資料も一応の完成を見た暁には公益財団法人日本イタリア文化会館の協力のもとネット上に公開して、国内のみならず広く全世界の研究者に資する可能性を検討している。加えて研究分担者は、上記『俗語論』の文献学研究の第一人者であるカルロ・プルソーニ教授を日本に招聘し、ベンボのテクスト読解・分析に関する重要な助言をえた。さらにプルソーニ教授には、京都大学、京都外国語大学、東京大学、イタリア文化会館(大阪)で講演を行っていただき、国内におけるイタリア文学研究のレベルアップと専門分野の情報発信を実現した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 村瀬有司	４．巻 68
２．論文標題 『エルサレム解放』における直接話法の配置と効果	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『イタリア学会誌』	６．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村瀬有司	４．巻 40
２．論文標題 「『エルサレム解放』の分離型の直接話法―行の途中から始まるタイプの文形態と効果について―」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『地中海学研究』	６．最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村瀬有司	４．巻 67
２．論文標題 「『エルサレム解放』の7行目終わりの直接話法：配置の特徴と効果について」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『イタリア学会誌』	６．最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村瀬有司	４．巻 なし
２．論文標題 「『エルサレム解放』における1行の直接話法の配置と効果」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『天野惠先生退職記念論文集』	６．最初と最後の頁 98-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 村瀬有司
２．発表標題 「『エルサレム解放』における直接話法の導入表現の配置　ー前行末尾までに導入表現が示され次行冒頭から発話が始まるタイプについてー」
３．学会等名 イタリア学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 トルクァート・タッソ（村瀬有司訳）	４．発行年 2019年
２．出版社 水声社	５．総ページ数 156頁
３．書名 『詩作論』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	天野　惠 (Amano Kei) (90175927)	京都大学・文学研究科・名誉教授 (14301)	